

集住体における中庭の有効性についての考察と提案

—「コルテ松波」における試みを通して—

Consideration and proposal of effectiveness of courtyard in housing complex.

: Case study and attempt in Corte Matsunami

10823002 田中 みどり

主査 篠原聡子 准教授

副査 石川孝重 教授

副査 定行まり子教授

中庭、コートハウス、ワンルームマンション、共用空間、コミュニティ
Courtyard, courthouse, one room mention, common space, community

序論

1. 研究の背景と目的

1 研究の背景

近年、人口減少が顕著になっているその一方で、世帯数は増加している。単独世帯、夫婦のみ世帯、核家族など、ライフスタイルが多様化していることで、世帯人数平均が減少しているためである。さらに、晩婚化や少子化、高齢化が進んだことで、一人暮らしという選択をする人は増えている。居住単位は、“～世帯”から“個人”という最小単位になりつつある。

“個人”という単位は、仕事や趣味、住まいなど、ライフスタイルを自由に变化させること、選択することを可能にしている。しかし“個人”は社会と関係しないということは不可能であり、周囲に何らかの影響を与えている。知らず知らずのうちに迷惑をかけていることも多い。家族や近隣の関係があったならば、配慮しあうことや注意することもできたが、プライバシーを守られすぎた結果、不満を溜め込んで爆発させるような事件も社会問題となっている。“個人”という単位で暮らしていたとしても、様々な状況で他人と関わらずに人は生きてはいけない。そのとき、他人と関わることが安心や、楽しみであるべきだ。家族や近隣という集住体に属さないことで、社会と個人という二つの世界を行き来するだけになり、防犯面や災害時の不安だけではなく、精神面、肉体面、経済面のリスクをはらんでいる。“個人”を尊重した生活を受け入れるためにつくられたワンルームマンションは、プライバシーを尊重した片廊下式のものが多く、集合住宅内のほ

かの居住者とかかわりを持つことは難しい。しかし集合住宅は、集住体としての潜在能力を持つはずである。家族のように集住体に属することで社会の間にもう一つの領域を持つことが、社会への流動性を高めるはずである。形だけではなく、生活や精神面においても、集住体であると認識できる環境を作ることが課題である。

2 研究の目的

集住体の形式の一つとして、様々な地域や時代のなかで繰り返し表れてきた中庭型住宅を取り上げて研究する。元來中庭型住宅は、伝統的な集落や社会において、気候などの自然環境や他部族の襲撃などの社会的状況から身を守るために生まれた。文化や科学の発展の過程で、安定した外部環境を得るという機能だけではなく、家族の中心的な空間としての役割を得るようになった。中庭が外部であることで、個人は家族という集住体から必要に応じて切り離し、個人を尊重した空間をもつことができ、同時に社会を引き込む要素ともなりうる個人という単位をもちつつ、家族という集住体が社会とのつながりを重要視していたことがわかる。この中庭空間こそ、“個人”という居住単位が選ばれている現在の状況の中で、社会とつながるための集住体をつくる役割を果たすのである。

中庭型住居の成り立ちや目的、変遷を調査し、“個人”と家族という“集住体”に対して中庭が果たしてきた役割と効果を分析することで、“個人”を単位とするワンルームマンションに、集住体としての有効な関係性を構築するために、建築的空間がもつ可能性を探る。

本研究の最終的な提案にあたっては、既存のワンル

ームマンションで、中庭型集合住宅である「コルテ松波」に対する提案を行なうにあたり、中庭を調査すると共に、建築的空間の提案、設計をする。実現したものである場合には結果のフィールドバックを行い、次の提案につなげる。

本論

2. 中庭型住宅の研究

概要

「個・集住体・社会」という関係が成り立つ空間を分析する。“個”とは精神的に独立した一個人を示す。“集住体”とはこの章では、一つの住宅に住む一家族を示す。家族という明確な集住体の存在する事例を研究することで、集住体にとって中庭型における重要なデザイン要素を抽出したい。中庭型住宅では、中庭を家族構成員の各個人が生活する居室が取り囲む。“個”と、“集住体”の中心とが視覚化されている。中庭型住宅の中で、さらに、中庭が“集住体”の中心として機能しているもの、次に、社会を引き込む空間として利用されているものを抽出し、「個・集住体・社会」の3つの世界が成り立つ利点と、成り立つためのヒントを見つける。

3. 2 中庭型住宅の事例研究

中庭型住宅として、3つの文献「建築資料集成」、「コート・ハウス論」(1974、西沢文隆著)、「現代のコートハウス」(1973、D・マキントシュ著)より“生活空間の一部として利用されている中庭を持つ住宅”を抽出する。まず、「建築資料集成」、「コート・ハウス論」より、古来世界中で作られてきた中庭型住宅を分析し、中庭型という住居形態が必要とされたきっかけや、その発展の仕方を探ることで、中庭型の有用性を探る。次に、「現代のコートハウス」より、古来の中庭型住宅を、近代の人々がどのように発展させたか、また、中庭型住宅のどの要素を重要視し、空間装置として利用するようになっていくかを探る。最後に、建築資料集成から日本の中庭型住宅を抽出し、分析する。

□ 分析方法

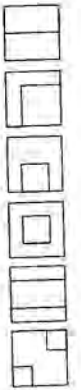
対向壁面の距離、中庭の中にあるもの、中庭に面する室(出入り)、境界形体、開放度と形体の分類(中庭タイプ、開口部位置、アクセス方式)などを図面から抽出する。ここで開放度とは、社会に対して中庭が開放的であるかの「外部への開

放度」と、家族人員に対して中庭が開放的であるかの「内部への開放度」に分け、評価軸を設けて当てはまる項目の合計ポイントを出す。

分類1

中庭タイプ：中庭の建物に対する配田を示す。

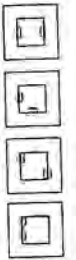
| | |
|--------|----------|
| type A | 1辺隣接 |
| type B | 2辺隣接 |
| type C | 3辺隣接 |
| type D | 4辺隣接 |
| type E | 分譲によるコート |
| type F | 複数のコート |



分類2

開口部の配田：居室向きの開口部の向かい合いの方法。

| | |
|----|----------------------|
| 対向 | 開口部が向かい合う |
| 並列 | 向かい合わない辺に開口部がある |
| 対角 | 向かい合う壁に開口部があるが、対向しない |
| 並列 | 同じ辺に開口部がある |



分類3

アクセス方式：建物に直接エントランスがある方式と、中庭から入る方式。

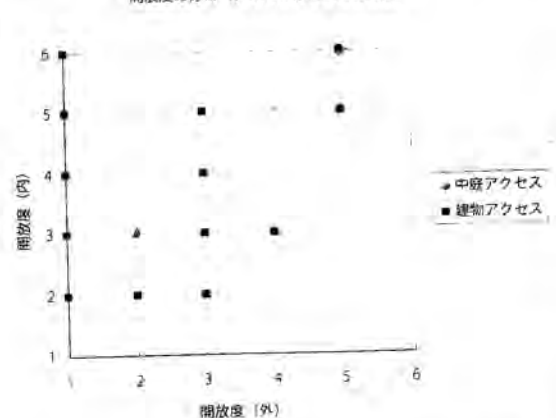
| |
|----------|
| 中庭からアクセス |
| 建物からアクセス |



□分析と考察

中庭型住宅における中庭の性質は、アクセス方式によって大きく二つに分けることができた。

開放度の分布 (アクセス方式による分類)



中庭と外部がつながっていることで、社会への開放度が高くなるだけでなく、家族間での開放度も高くなる。中庭空間の利用の仕方を見ると、中庭アクセスの

住居の中庭は、アクティビティがある場所となっており、家族が空間を共用した行為が現れている。開放度が高いという結果が出ても、中庭が家族のアクティビティの現れる場所として利用されているとは限らない。しかし、共用の行為が中庭空間で見られる事例ほど、社会と家族の両方に開放的であるといえる。建物アクセスの事例に多い、家族だけに開放的な住居は、集住体に常に関係していないとならない。そのため、家族に対する開放度も低い。社会と集住体と個という3つの領域を個人が選択するためには3つの関係性が流動的である必要があると考えられる。つまり今回の研究の目的においては、中庭アクセスが有効的であるといえる。

伝統的中庭型住宅での中庭は、自然の恵みを得る場所であると同時に、集住体内の個人の作業空間でもあった。しかし、近代化が進むにつれて、家事の場は建物の中へ、仕事の場は社会へと移っていった。中庭における行為は、特に近現代の住宅において平面図から読み取ることが難しいが、中庭で家族のアクティビティを生む一番の方法は、どの時代においても中庭型アクセスである。アクセス空間であるというだけで、いやがおうにも中庭で人の行為が生まれるからである。

開口部の配置を見ると、伝統的な事例において対向配置が多いものの、居室と中庭を隔てる境界形体は壁が主で、開口部は出入り口のみであるため、プライバシーの問題は起こらない。開口部を自由に取ることができるようになったことで、プライバシーを守るために開口部の配置に工夫が見られるようになった。開口部が開放的になることで、中庭に対する視覚的な開放度が高まり、居室内での個の行為が限定されてしまう。そのために、居室と中庭の二つの空間に意識的な、そして機能的な境界ができてしまったと考えられる。

植栽や、庇など、中庭と個人の間には緩衝的な要素を加えることで、個であるときと集住体であるときを選択でき、さらにその要素が集合するときのアイテムとなっていることが分かった。中庭と居室との間に緩衝空間を設け、境界を緩やかにすることで、空間に流動性が生まれると考えることができる。

3 中庭型住宅「GAZEBO」実測調査

実際に個のライフスタイルの変化を経験した集住体の、中庭住宅の例として、山本理顕氏の自邸「GAZEBO」を研究する。2008年10月から2009年2月の調査レポートを再編してここに記す。竣工よ

り20年が経ち、世帯編成は変化してきた。「GAZEBO」の中庭と、3つの居室スペースを、居住者の変化と共に時系列で整理しながら、中庭が引き受けた役割と、可能にした暮らしを検証する。

□調査日程

第一回調査 実測調査、ヒアリング調査

第二回調査 船山氏（建築家、山本氏の妻。）ヒアリング

第三回調査 山本氏ヒアリング

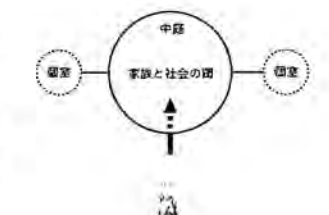
□分析 ー3つのステージー

「GAZEBO」の20年には、家族の変化が常に起こっている。特に特徴的な変化を取り出し、3つのステージとして分類した。

第一期は“境界としての中庭”である。建築家夫妻と高齢で身体に不安をもつ、母とその母の姉妹、大人4人が住む



「GAZEBO」の中庭は、この時期、それぞれの独立した個人の生活が成立するための「境界」だった。しかし、姉妹の空間と夫妻の居間の間にある5mという「境界」は、互いの動きはわかるが、声は聞こえない、そうした機能をもった「境界」である。夫妻にとっては、雨の日には傘をさして、トイレや風呂に行かなければならなかったとしても、「境界」としての中庭はそれぞれにあることと、共にあることを成立させるための必須の要件だったのではなかったか。



第二期は“屋根のない部屋”である。いわゆる、核家族の子育て期、中庭は「屋根のない部屋」として、居間と、かつて母の空間だった対面の部屋をつなぐ。それぞれの室内空間から行為があふれだし、子供の遊び場となり、ハンモックでの昼寝の場所となり、夏の晴れた夜には、布団をしいて星が眺められる寝室にさえなった。週一回行われた食事会（コモンミール）では、子供たちの遊び場となると同時に、集まってくる



人たちの客用玄関でもあった。「屋根のない部屋」はさまざまな行為の重層を可能にした。

第三期は“都市としての中庭”である。家族が成長することでそれぞれが自立し始め、異なった生活を送るようになった第三期において、中庭は個室という個人の空間でもなく、家族室という家族の空間でもない、新たなひとつの部屋としての機能を持つようになる。友人を招いてのパーティでは中庭は、中心的なパーティ会場となる。家族のプライベートな空間であった中庭が、外部との関わりをもつことで、様々な人々が入りする、都市的な場所になっていく。

〈ネクスト・ステージ〉

「中庭は家族の最もプライベートな場所」と位置づけて建てられた「GAZEBO」は、三十年の年を経て、都市的な空間としての役割をも担うようになってきている。それは、連続した家族室が、「集会室のようになっている」という船山氏の言葉にもある通り、頻繁に仕事関係や友人などたくさんの家族以外の人が入ってきていることによるものである。「家族のプライベートな場所」であるはずの空間に他人が頻繁に入ってくるということは、家族が家族間のプライベートな繋がりを越えて、社会との関わりが強くなっていると言い換えることもできる。つまり、今後の「GAZEBO」が社会との関わりを強化する方向にあることを暗に明示しているように私たちに感じられた。そのため今後の「GAZEBO」を第四期とするならば、第四期においては当初の図式を改めて構築すべく、社会とルーフをつなぐ閘を個室とするためにベッドを別の空間に設けることが予想できる。そうして「GAZEBO」は自然と理頭氏の言う「地域社会圏」のひとつの役割を担うものになっていくのではないだろうか。



〈空白である意味〉

「GAZEBO」の中庭は、様々な使われながら、常態としてヴォイド、空白である。空白には、2つの意味

がある。一つは誰かに占有されていないこと、もうひとつは特別な意味を背負っていないことである。四合院の中庭も、韓屋の中庭も、最初の意味ではヴォイドである。しかし、対面する建築によって、それは厳密に意味づけられている。四合院なら、正面に居間兼応接間となる〈正房〉、その左右に家長の寝室となる〈耳房〉があり、中庭はその空間の前室として意味をもっている。そこで、ハンモックをつつたりしてはいけないのである。「GAZEBO」では、3階から階段を上って中庭にでると正面に見えるのは、バスルームである。山本理論にしたがえば、「中庭とはプライベートな場所」であるわけだから、当然前記の中庭のような空間のヒエラルキーを背負っていない。

「中庭とはプライベートな場所」とするのは、プライバシーは個人に帰属するものではなく、家族という関係性のなかにあり、最もプライバシーが必要とされるのは、家族の関係がみえる空間、家族が介する場所であるからである。しかし、プライバシーを人から見えないこととすると、中庭は家族のみに閉じた空間ということになるが、実際には、「GAZEBO」の中庭には、調査でも明らかのようにそんなに閉塞的な場所として存在しているわけではない。このプライバシーを人から見えないこと、とするのではなく、自分たちの意思によって設定できる関係、つまり社会や制度から自由という意味で、使う方が「GAZEBO」の実態には沿っている。

家族の中にある空白は、すでにそこにはなにも継続的、象徴的なものがないという実態でもあるし、どんなリセットも可能であるということでもある。「GAZEBO」の中庭は、家として表徴を屋根に譲り、ひたすら現実を受け入れる装置として機能しているのである。

3. 既存中庭型集合住宅の実態調査 コルテ松波

3.1 事例選出理由

集合住宅に中庭があることで、個と集住体と社会という3つの領域が存在し、様々なライフスタイルに対応するのか検証する。研究対象の条件として、第一に“個人”と“中心”という図式の成り立つ集合住宅として、中庭型であること。第二に、個で住まうというライフスタイルが成り立つワンルームマンションであること。第三に、中庭が直接外部とアクセスできる形式であることである。そこで、条件に当てはまる中庭

型ワンルームマンション、コルテ松波の調査を行った。ワンルームマンションという形式をとっている集合住宅で、中庭をもち、かつ、中庭に向けて玄関と主要な開口部をもつ事例はきわめて少ない。多くのワンルームマンションは片廊下式で、中庭を囲んでいたとしても、主要な開口部は中庭側ではなく外側に向いている。コルテ松波は、本研究における“中庭型”、と呼ぶにふさわしい、中庭を中心とした住戸配置をしている。さらに、共用のランドリールーム、コモンスペース、郵便室が1階に配され、一つの集住体として同じ空間を利用しているという意識や、コミュニティが生まれる潜在能力を有しているといえる。個と集住体の存在、アクセス方式と開口部の条件に一致する。

2 コルテ松波 概要

コルテ松波は千葉市の中心市街地に1994年にワンルームマンションとして建設されたワンルーム形式の集合住宅であり、2008年までは企業の独身寮として使用されていた。2009年改修が行われ、独身寮から一般の賃貸集合住宅となった。

コルテ松波が建設された都市は、すでにバブル崩壊後であり、バブル期ピーク時1990年に首都圏で約16000戸もあった供給も約1500戸まで激減していた。また、バブル期に過剰大量供給されたワンルームマンションの多くは投資目的で居住者のニーズは無視されていたため、極めて居住環境が悪いものが多く、また住戸数を稼ぐことを重視されていたワンルームのため、利益に跳ね返らない共用空間は削られ、片廊下式のワンルームマンションが多く建設されていた。

このコルテ松波はそうしたワンルームマンションの抱えるいくつかの問題を解決しようと試みて建設された。ワンルームの住戸22戸と共用のランドリールームを、2棟に分けてふたつの階段とブリッジでつなぐという構造をとった。2棟の間の空間は中庭であると同時に、街路の延長である。改修後、住戸は19戸とし、4階にあったランドリールームは1階の奥に配置され、同じ棟の1階にある他2室も共用のスペースへと替えている。手前の部屋はメールボックスのための部屋となり、中心の部屋はコモンスペースとなった。つまり、片方の棟の1階部分をすべて共用スペースとしたことになる。共用空間としての存在が大きくなった中庭で、集合住宅内の人々がどのように関わっていくのかを観察していく。

□建物概要

構造：鉄筋コンクリート造一部鉄骨造 直接基礎／規模：地上4f 一部地下1f／最高高さ：12,400mm／軒高：10,600mm／階高：1-4f 2,600mm／天井高：2,435mm／住居ユニット：19戸／タイプA：17.53㎡ 17戸／タイプB：17.03㎡ 2戸／共用部分：ランドリールーム、コモンスペース1, 2：17.53㎡／敷地面積：334.92㎡／建築面積：163.75㎡／延床面積：443.40㎡／1-3f 面積：116.10㎡／4f 面積：85.10㎡／建蔽率：53.05％／容積率：132.38％／設計 建築：空間研究所

3.3 コルテ松波 実態調査

コルテ松波内現居住者の居住環境・生活とコミュニケーションに対する意識を調査することで、単身者居住の実態と、求めている環境を探り、コミュニティ設計の手法を抽出する。

| | |
|---------|-------------------|
| アンケート投函 | 2009年10月6日 |
| アンケート回収 | 2009年10月14日 |
| ヒアリング調査 | 2009年10月17、18、21日 |

①アンケート調査概要

アンケート調査では、3つの点を重視して質問している。

- ・ 中庭と、新しく設置されたコモンスペースに対する評価と利用度
- ・ コルテ松波内での生活の実態と満足度
- ・ 近所づきあいに対する意識

重要視する項目は、中庭とコモンスペースに対する評価である。2009年4月に入居が開始され、アンケート調査を行った10月の時点で、一番居住期間が長い居住者でも6ヶ月目であった。短い期間で居住者間に生まれた関係と、コモンスペースに対する説明のなかった状況下での、居住者の中庭とコモンスペースに対する意識を知る。また、コルテ松波での生活は、居住者間の関係という面で、片廊下式の一般的なワンルームマンションとどのような違いが生まれているのかを抽出したい。

②ヒアリング調査概要

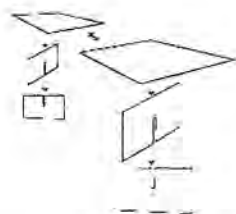
ヒアリング調査では、現在の生活状況から、どのような発展を居住者が望んでいるのかを探る。共用スペースの評価を踏まえ、単身者の求める、他人との関係性のあり方や集合住宅内と周辺地域におけるコミュニティのあり方を探り、コミュニティ実験を行うためのヒントを得る。

③結果と考察

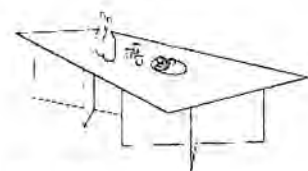
めの要素となる。さらに、分解すれば中庭に運び出すことができ、2つのテーブルとなる。



卓球をする



分解をする

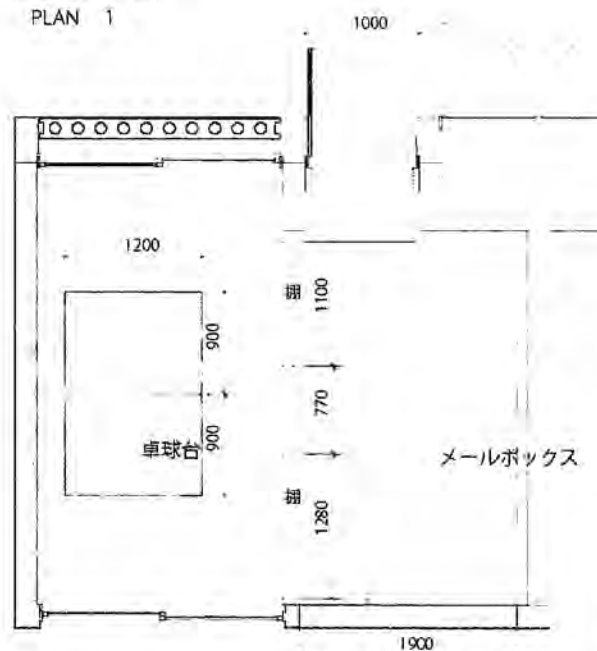


テーブルとして使う

□ 設計

普段の設置場所として、郵便室の空きスペースを使用する。①市販されている大きさの板材(900×1800)で作ることのできる大きさ②家庭用卓球台の規格サイズ(1200×2400)に近づける③分解することを考える④郵便室の空間を最大限に生かすという4つの点に留意し設計する。

PLAN 1



COMMON 1 (郵便室)

□ 実験

- (ア) 掲示板で卓球台の利用を呼びかける
- (イ) BBQ大会の際、実際に使ってもら

(ウ) イベント時、テーブルとして使う



□ 結果

大人数が集まる状況において、中庭は広いため人の抛り所となる場所がない。空間の中に1つテーブルが置かれるだけで人は集まってくる。また、行為の分散を可能にする。集会室内部にあるテーブルと、中庭に置かれた2つの卓球台に人の中心が分散し、ガラス一枚を隔てているという状況で集会室中庭が流動的に繋がる事ができた。

⑤ 掲示板作成

□設計趣旨：住人同士の連絡や情報交換の場として利用できるツールをつくる。また、中庭に置くことで全ての居住者の目に入ることと同時に、周辺の住人にも見てもらうことができる。

□設計：卓球台の制作で出た端材を利用し、黒板塗装スプレーをふく。

□実験：イベントの告知や本の入荷のお知らせなど、「コルテ松波」内で起こったことを不定期に書いていく。

□結果：実験の説明を、紙媒体だけではなく、よく目に付く場所におくことで、イベントや共用スペースに対する興味や理解を得られた。また、掲示板に工夫を加え、集会室の前に固定してくれた居住者がいた。一方的ではあるが、間接的に、コミュニケーションをとることが心地よいと感じる居住者は多いようで、高評価を得られた。

⑥ 洗剤用の棚の設置

□設計趣旨：提案④の結果から、直接的ではなく、間接的に他の居住者と関わっているという意識を持つことのできるアイテムが初めの段階で必要であるとわかった。間接的に相手を知り、同じ空間を共用することから、同じ空間で協働する行為に繋がるはずである。そのために、“家族”という基本となる関係性がない時、“集住体”という認識を視覚的に現すものが必要である。第一段階として、個人の私物を共用空間に置く。生活がはみ出す。第二段階として、人とは違う使い方をしたり、自分風に飾り立てたりする。その人物のア

アイデンティティが表出する。第三段階として、個人の私物として認識したものを、集住体で集まったり、協働するために利用する。



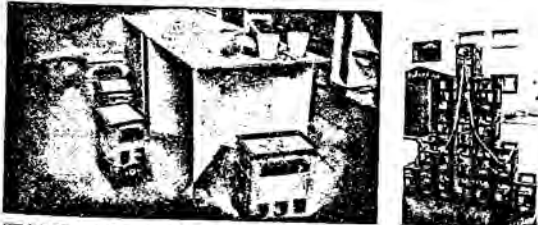
□設計：洗剤を入れることのできる容器であること、イスとしての強度と機能をもつこと、日常的にはコンパクトにまとめて置けることを考慮し、一升瓶ケース・ステンレス丸鋼・板材（卓球台の端材）・リングゴム（4mm穴）を使用して設計する。



詳細図面

□実験

- (ア) 洗剤用の棚としての利用（日常）
- (イ) イスとしての利用
- (ウ) インスタレーション



□結果：第一段階の棚の私物化、第二段階のアイデンティティの表出が進んだ場合、第三段階の集住体での利用は難しい。しかし、日常的に共用スペースの中で各居住者の個性が1つにまとめておかれていることで、集住体であるということが視覚化するという点においては、間接的ではあるが集住体としての一体感をうむことにつながる。

⑦ バーベキュー大会の開催

□ 企画概要

住人同士のコミュニケーションをネットワーク化するための契機として、中庭と集会室空間を利用したイベントを行なう。

□ 実施

- ① 卓球台をテーブルとして中庭に出す
- ② プロジェクターによる映画上映を行なう
- ③ 共用スペース全体を利用する



□ 結果

居住者への参加を、紙媒体、ポスター、掲示板、直接の呼びかけにより募ったが、私を含め3名と、居住者の友人が20人ほど参加した。実施後のアンケートでは人数が多すぎて入り辛い雰囲気を感じた、忙しかったが参加したかったという意見を得ることができ、周囲との関係を望んでいることがわかった。一方で、やっているのは構わないが参加はしたくないという意見もあった。しかし、不快ではないということは、興味に繋がり、参加してみようという気持ちに発展する可能性はある。

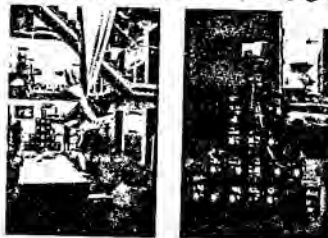
⑧ クリスマスパーティの開催

□ 企画趣旨

中庭空間をより利用するための実験を行なう。テーブル、イスを置くと共に、「コルテ松波」の中庭だからできる提案をする。植栽用の棚を利用し、中庭全体にキャンドルサービスをするインスタレーションを行い、居住者個人の利用空間から1つの大きな空間を作ることによって集住体としての認識をする。また、シンボルとして、洗剤用のボックスを利用したクリスマスツリーを外部からの目隠しとして設置し、周囲から困うことで、周辺住人の興味を誘う。

□ 実施

- ① 植栽用の棚を利用したキャンドルサービス
- ② 洗剤用ボックスでつくるクリスマスツリー



〈実験のまとめ〉

コルテ松波において、私が滞在した2ヶ月間に見ることのできたシーンを紹介する。表は、アクションを起こしたときの人数と、関わり方の深さの二つの軸で各シーンの性質を分布した表である。関わり方の深さについては、個別に「同じ空間を共用する」、同時に「同じ空間を共用する」と「同じ空間を共用し、行為を協働する」という三つの評価軸に分け、関わり方の度合いを定義している。

この分類によって、コミュニティ形成のための契機となったと思われるもの、ネットワーク形成につながったもの、関係の継続につながるとと思われるものの3つに分類できた。

コミュニティの契機となったものについては、1人で行うものに関しては日常的な生活に順ずるものから発展した行為が多く、積極的な意思が必要ない。2人から複数人に至る行為に関しては、自発的に起こるものではない。しかし、一度ははじめたら、続けることのできる行為である。この一段階目が集住体の認識をするためには最も重要であり、次の段階へ移る土台となる。

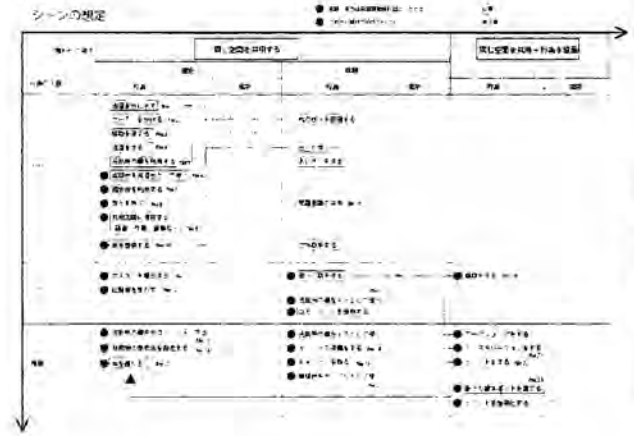
ネットワーク形成につながったものは、1段階目のきっかけのから発展した行為と、今回の実験でつくられた行為である。この2段階目のなかで、1人の行為にまで発展した居住者は6人、そのうち、2人から複数の行為まで発展した居住者は2人であった。

関係の継続化につながる行為は、イベントなど、同じ空間を共用しつつ、行為を協働する3つめの段階である。集合住宅内でイベントを行ったり、共用空間を積極的に居住者同士で利用使用とする行為である。ここで重要なのは、参加したくない居住者に迷惑をかけることである。ある程度の使用のルールが必要であり、参加はしたくないけど、イベントをやっているのは構わない、という状況が成功すれば、自分も日程が合えば参加したいという気持ちに発展する可能性はある。

この3つの段階の流れをまとめると、表のようになる。3段階目の、関係の継続化が行われることで、1段階目、2段階目の行為が多様化していくと考えられる。

アンケートの時点ではコミュニケーションをとりたいて思っていなかった居住者も、何度も出くわすうちに、自分も参加してみたいという意識を持つようになっていた。個人で住むことにおいて周囲との関係に必

要性を感じていない、わずらわしいと感じている人が多い。しかし、コミュニケーションをとることが、必ずしも面倒なことではないはずである。特に知らない土地にやってきて回りのことをまったく知らないまま暮らし始める単独世帯にとって、地域や周りの情報を得るために、助け合うこと、協働することで快適な我が家が、住みやすい集住体になる可能性は高いと思われる。



4. 2. 3 新たな提案

表「シーンの想定」で示したように「契機をつくる」「ネットワークをつくる」「関係の継続化」の3つの要素を引き続きつくっていくことが必要と考えている。提案①～③の既存の提案は居室と中庭、個と社会の境界を“ゆるやかにする”ものであった。一方、今回私の今回の提案は、境界を“広くする”ものである。この境界こそが集住体である。境界を広げることで、個と集住体、集住体と社会という3つの領域をつくる始まりをつくれたと思う。

今後の提案としては、広くなった境界“集住体”をより視覚化すること、より身近なものにしていく必要がある。居住者が日常生活で利用できる範囲を広げること、利用できるアイテムを増やすこと、利用しやすく視覚化させることを考えている。

